

富岡町除染検証委員会（29回）議事録

日時：令和7年4月4日（金）13:15～15:15

場所：富岡町役場 正庁

出席委員：河津委員長、飯島委員、飯本委員、井上委員、藤田委員

配布資料：

議事次第（第29回）

除染検証委員会 出席者名簿

資料1 富岡町除染検証委員会（28回）議事録

資料3 富岡町における除染の進捗状況について

資料4 Dシャトルを用いた帰還町民の外部被ばくに関する結果について

参考資料 ライフとみおか27号

○町長あいさつ

○委員長あいさつ

○議事：

1. 第28回議事内容の確認について（資料1）

（ア）事前に委員、オブザーバーに送付して確認頂いているため説明は省略。

①特に意見なし。

3. 富岡町における除染の進捗状況について（資料3）

（ア）環境省より、資料3に基づき説明がなされた。以下、議論された内容の概要。

①（藤田委員）今年度中には、どのくらいの除染面積を目標としているのか。

⇒（環境省中村課長）除染対象面積110haのうち約50haが継続してきた工事で終わる予定になっており、残り60haとなっている。今後契約予定の工事の発注規模が81haとなっており、見込みとしてはかなり進捗する予定。一方、特定帰還居住区域外縁の面積が約40haあり、区域内の残り60haと合わせると今の発注規模では完了しない状況。いつまでに完了できるかは申し上げられないところがあり、北側のアクセス道路の付近については通常で施工できるかということもあり、町と相談しながら進めていく。

⇒（河津委員長）進捗状況については、これからも示してほしい。

4. Dシャトルを用いた帰還町民の外部被ばくに関する結果について（資料4）

（ア）事務局より、資料4に基づき説明がなされた。以下、議論された内容の概要。

①（飯本委員）大変すばらしい試みだと思う。特にライフとみおかに結果を掲載して町民

に実際の状況をお知らせしたことがすばらしいと思うが、町民から何らかの反応はあったか。

⇒（富岡町斉藤係長）特にこの結果についての相談や質問はありません。

⇒（飯本委員）公的な形での質問は出しにくいかもしれないので、町役場側から近しい方にコメントを求めるなど個人的にでも良いので感触をつかんでほしい。それによりコミュニケーションや理解が深まり、次に何ができるかという議論に展開できると思う。資料を上手に使ってほしい。

⇒（井上委員）毎月我々の方にとみおか議会だよりを送ってもらっているが、議員の方が線量について質問されている。議会の中でも説明して広く理解を得るのが大事ではないかと思う。

⇒（富岡町斉藤係長）議会の中で議員の方から放射線のことや食品の関係など質問をいただいている。新夜ノ森地区で作ったかぼちゃの濃度が高くてどういうことなのかと質問をいただき、町で調査をした結果を説明したがなかなか理解を得られなかった。飯島委員にもご協力いただき、理解を得ようと取り組んでいる。このような結果に関して、情報誌の作成やホームページを充実させ、もっと情報を発信していきたい。

②（藤田委員）Dシャトルの回収率はどのくらいなのか。以前、帰還困難区域や特定帰還居住区域ではないところでDシャトルを町で配ったが、回収率が良くなく評価がきちんできなかつたと伺ったと記憶している。

⇒（富岡町斉藤係長）当時は町でDシャトルを1万台用意して町民に配り、当時4割程度の使用率であった。年々減っていく中で、町ではDシャトルの線量計を持っておらず環境省委託事業で実施している原子力安全研究協会の協力を得てDシャトルを町が窓口になって貸出している。人数的に限られた人数ではあるが、解除されたところにいる町民の方も必ずDシャトルで定期的に測定し、その積算線量を報告し評価をいただいている。

③（河津委員長）このデータは個人・一人のデータと考えてよいか。

⇒（富岡町斉藤係長）はい、ここでは町民に3か月間持ってもらって、実際にどのようなデータになるのか実施してもらった。他にも何名か線量計を持ってもらい、その評価については原子力安全研究協会から報告いただいている。

⇒（河津委員長）かなりきちんと細かくデータが出されている。他の町では家に帰った時の状況を調べる時に置きっぱなしにしてしまう例が結構あった。そういうこともありなかなか実態をつかむのは難しいのだが、このデータに関してはしっかりとられているといったイメージを受ける。

⇒（富岡町斉藤係長）本当に3か月間首に付けてくれて非常に貴重なデータだと思う。

④（飯島委員）しっかりつけていただき、作業場所の線量率も評価してあり貴重なデータだと思う。面白いと思ったのが、ビニールハウス内の地面にシート貼りをした4月12

日の時間線量率を見ると、ビニールハウス前の0.49より高めの数字が出ている。一方4月8日の植林のところは植林時が1.09だが時間線量率はそれより低い。やはり地面に近いところで作業している時は空間線量率よりも高めに出来、立って作業している時は1メートルの線量率と同じくらいなのかなと。こういったデータが今後解除したときに、どのような作業をした時にどのくらいの被ばくにつながるのか参考になる。解釈を加えてもらえると町民の理解にもつながるので、町の方でも工夫していただければと思う。

⇒（河津委員長）是非JAEAさんにも協力してほしい。

⑤（復興庁樋本次長）先生方に質問ですが、リスクコミュニケーションの観点から、ライフとみおかで示されているグラフの見せ方だが、我々が普段扱っているグラフであれば最大値が $0.5\mu\text{Sv/h}$ で良いと思うが、この日裏庭で作業していて浴びる線量はそんなに大きな数字ではないのだと言わんとするのなら、それにふさわしいスケールでのグラフの示し方があると思う。コミュニケーションを取っていくという観点からすれば、このスケール感で良いのか、見方・書き方についてヒントをいただければと思う。例えば、最大を $5.0\mu\text{Sv/h}$ にしておくとう極端に突出するグラフはないだろうし時間帯によっても変化はさほどないので、裏庭に出ても大丈夫だなという感じを与えるグラフになり、逆に最大を $0.2\mu\text{Sv/h}$ にしておくとうこの瞬間だけグラフが飛び出るような絵姿になってしまう。同じ数字を見せるにも見せ方があるので、ここではどのように見せるのが的確なのか。推定年換算線量が 1.43mSv なのでそれとの絡みで考えても、もう少しスケールを大きくとってもよいのかなと思う。

⇒（河津委員長）実際このデータをそのまま冊子に載せてもリスクコミュニケーションは取れない。当然ながら工夫が必要だと思う。

⇒（復興庁樋本次長）裏庭に出て植栽や外に出たら積算線量が多くなり、家の中だと線量が小さくなると当たり前のことを言うためのグラフではなく、こういったデータが出たので外に出ても大丈夫と言うのかももう少し控えて下さいと言うのか、その辺りの事が住民の皆さんは欲しいはず。

⇒（飯本委員）こういう雑誌を使って一方通行で情報を伝えようとするとう今のような議論になりがちだと思う。持っているデータを提供するためのツールのひとつなので、現状の書き方、示し方が悪いとは私は思わない。これを使ってどうやって積極的なコミュニケーションをもつか、これを見てどう思った？といった話のきっかけにするツールとして使うことの方が大事。例えば我々が学会でプレゼンする時に、同じデータをAさんがプレゼンするのとBさんがプレゼンするのではグラフの見せ方が変わるの、伝えたい内容やメッセージが変わるから。役所の方々が作る資料では極力特定のメッセージが出ないようにするでしょうから、このような形になるのだと理解している。このような資料やツールをどう使うか、についての議論を深めた方が前向きな話になると思う。

⇒（復興庁樋本次長）非常に参考になった。国としてとか役所として公的な立場で言うとう

限界はこれであるわけだが、それを知り合いや友人や家族などで反応を見てみるところが大事だということと理解した。

⇒（竹原副町長）例えばこれをグラフに描こうとすると、空間線量年間1mSvを目標にしているという話になってくると0.23 μ Sv/hなので、ここに0.23 μ Sv/hの線を引くとそれより上をいっている。敢えて年間20mSvとするならいいんです。そこを基準にするなら良く見えるが、安心・安全と言った時は0.23 μ Sv/hだと皆さん知っているので、この書き方しかないと思っている。

⇒（河津委員長）自分のメッセージを出そうとするとそれを説得するような作り方になってしまう。受け取った側がどう考えるかが大事であって、決して押し付けるものではない。今回の震災の議論の中で今一番問われているのがその部分だと思うので、そこを踏まえて議論できればと思う。

⇒（井上委員）桜まつりの時にブースを出して、興味のある人に見てもらおうというのも一つの手段ではないか。

⇒（河津委員長）JAEAやリスコミセンターがブースを出すと聞いている。

⇒（竹原副町長）最新版のライフとみおかで外部被ばく量が推定年換算線量で1.43mSvとなっているが、追加被ばく線量が1ミリと考えると、自然界で0.4あるので。この方の周りの環境や生活の場所の地図を出して、このような場所で生活して年間1mSvだとすれば私も大丈夫といった見せ方をすれば良いのではないか。

⇒（富岡町斉藤係長）今回の線量1.43mSvについては、日本人の自然放射線量が2.1mSvという中で宇宙線・大地からの放射線・放射性ガス・ラドン等の線量は1.11mSvで食物の経口摂取によるものも除き、差し引くと事故由来の線量は0.32mSvになるので非常に低い値であると思っている。放射能を気にしている住民のところを訪問したり、長崎大学や弘前大学の先生方とも連絡を取り合って相談していける体制ができている。

⇒（河津委員長）普段思っていることを言ってくるのは、貴重な意見だと思うし理解を得るためにも必要である。

⇒（井上委員）これは町民全員に配られているのか。それとも好きな人は取っていった下さいという形なのか。

⇒（富岡町斉藤係長）3か月に一回発行しており、全町民に町広報とともに配っている他、町のホームページの情報まとめサイトの中にも掲載している。また、いろいろな施設にもブースを設置している。

4. その他

（ア）富岡町除染検証委員会スケジュールについて

①（竹原副町長）委員の先生方から被ばく防止に対する戦略的な考え方が必要ではないかとご意見をいただいた。我々もそう思っており、ライフとみおかやDシャトルを用いて

被ばくはないのだというところを啓蒙していかなければならないと思った。一方、解除になったエリアについては線量がこうなったので解除していったという経緯があるが、特定帰還居住区域については帰還したい人のところだけ除染するといった状況であり、それに対して町民よりかなりの反論がある。Dシャトルを用いて被ばくは少ない抑えられているとわかると思うが、今までの解除の経緯からその辺りの理解が難しいところがある。検証委員会の先生方の意見、被ばくしない生活を送れば生活はできる、周りが全部除染されなくても大丈夫といったことへの町民の理解を変えていかなければならないと思っている。議員や町民の皆様にも0.23 μ Sv/hという数字がどこまでも残っているので、1.43mSvなら大丈夫なんだというところを見せて行って次のステップの解除に持っていかなければいけないと思っている。フォローアップについても的確な歩行モニタリングを行い被ばくしないような除染を進めているということを示していきたいと思っている。

⇒（河津委員長）14年経つと少しずつ変わってきていることはあると思う。それぞれの年月にあった評価を考えながらやっていく時期に来ているのかなと感じる。引き続き、いろいろな資料を示していただきながら検証委員会の中でも検討していければと思う。

以上